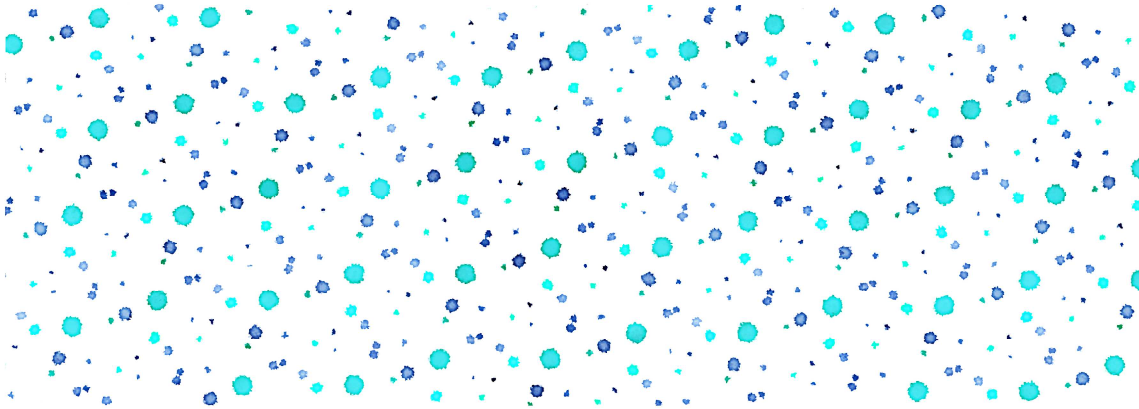
雪片／雪ふる日

ペーパーウェル07「そらから降る」



貝崎瑞子

貝崎瑞子
@hitokake_shell
2021.11.21

雪片

春でも夏でも雪は降る
しんしんと
それは何も降らないときよりも
しずか
手のひらに
飲みかけの缶ビールに
芝生に
あなたの髪に
降りつもる
目を細めるその瞬間に
わたしだけに見える

すべてを覆うまでに
時間はかからない
そう思うとき
わたしもあなたも吸収されている
動作のひとつひとつを音に分解して
きれいに抽斗に納めるように
どうかこのまま降りつづきますようにと
祈りにも似た気持ちで
あなたと手を繋いだ

埋もれたままのわたし
いつまでもやさしかったあなたは
もう意味がなくても
傘を差してくれた
それでも
嘘だよとは
言ってくれなかった

見上げた白い空から
落ちてくるもの
対象をうしなった空に
映るものは何もなくても
わたしの視線は上を向く
また降る雪を待ちわびている

雪ふる日

開いた本の頁から
羽虫が飛び出してきた
それはふわふわと上っていき
天井のそばを漂っていたが
いつの間にか消えていた
窓の外は雪が降っていた
雪は
灰色の町の上で
まだら模様を描いていた
私は一冊の本が
まだ読み終わらない

マグカップの下では
冷たい紅茶色の輪っかが
机にこびりついている

待ち続けることができると
思っていた
一冊の本すら
満足に読むことができない私は
やがてくる
おしまいの合図を
最後の頁に押し込んで
きっとそのまま
本棚に仕舞ってしまう

窓の外は雪が降っていた

雪は
紺色の空の下で
しんしんと
あのひとの足跡の上に
降り積もっていた